

特集

# 決定版！ 過活動膀胱 — All about OAB

## 企画にあたって

International Continence Society により、過活動膀胱（OAB）の定義が定められてから、10 年以上が経過しました。今日では、一般内科医や患者さんにも浸透し、定着しつつあります。わが国においては、2005 年に OAB の診療ガイドライン初版が、2015 年 4 月には第 2 版が刊行され、診断・治療の道筋がつけられています。しかしながら、まだまだ解決されていない課題が山積されています。

OAB は症状のみで診断されるため、診断が簡便であることが利点とされます。しかし、そこには大きな落とし穴が存在します。病因や病態生理が置き去りにされたまま診断や治療がされているという現状です。すなわち、“木を見て森を見ず” になりかねません。OAB 症状の背景に存在する疾患の本質を理解することなく、診断が行えてしまうことは、間違った治療につながる可能性がありますし、ともすれば医学の発展の妨げになります。また安易な診断は、医療の商業化を招いている可能性があります。OAB を引き起こす病因や病態生理は患者ごとに異なり、これを一緒に扱っていくことはできません。また、既存の治療法に抵抗性の OAB 患者も多く存在し、これらに対する治療はいまだ確立していません。

本特集では、これらの問題点を解決する糸口を見つけるために、OAB の現状と今後の展望について、13 人のこの領域のエキスパートにご執筆いただきました。OAB 診療の標準的な考え方に加えて、ガイドラインでは網羅できない内容を詳細に紹介していただいております。ぜひ本特集を熟読し、OAB の疾患像の今後のあるべき姿を考える機会にいただければ幸いです。

福島県立医科大学医学部  
泌尿器科学講座

小島 祥敬